愛知教育大学附属高等学校研究紀要第 48 号
pp.23～26（March, 2021）

コロナ禍における校務部の取り組み

―感染防止策を施した式典・ＰＴＡ活動・教育実習・国際交流活動―

校務部　小田原健一　宮本真衣
加古久光　有本明日翔

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症が広がるなか、本校は令和２年３月２日から臨時休校に入り、また管理職を除く教員についても緊急事態宣言後の４月１３日から在宅勤務が原則となった。教員の出校は５月下旬から徐々に認められ、５月２５日から３年生が、６月１日から１・２年生が登校し、学校は再開された。本稿では感染防止に配慮した学校の教育活動のなかで、校務部が主担当となっている式典・ＰＴＡ活動・教育実習・国際交流活動について報告する。なお、原稿執筆は４. 教育実習を実習担当の宮本が、その他を校務主任の小田原が中心となって担当している。

2. 式典

(1) 令和元年度卒業証書授与式

首相からの休校要請直後には卒業式が控えていたが、既にマスク着用と消毒の徹底、ご来賓と在校生の出席見送り、進行の簡素化などの計画を立てていたため、計画に沿って何とか実施することができた。

(2) 入学式をはじめとする令和２年度４月の式典

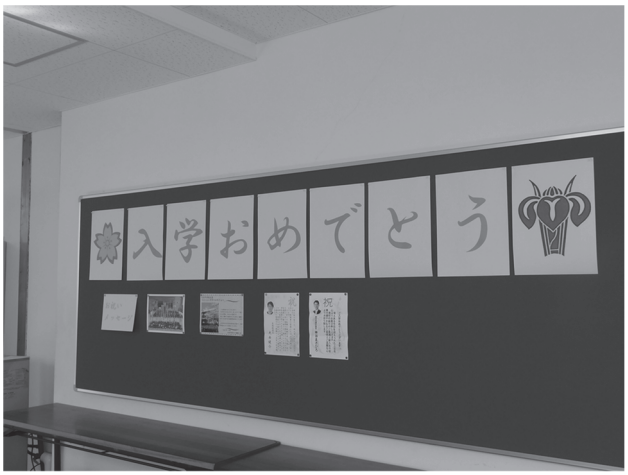
その後、３月末に新年度の式典の実施方法を検討していく中で感染防止の観点から当初は放送のみで実施するという案もあったが、せめて話し手の顔が分かるようにできないかという意見が強く、ビデオ会議アプリ Zoom を使用して、会議室の映像や音声を各教室のスクリーンへ配信する方法を試みた。コロナウイルスの流行から約１年が経った今でこそ、広く認知されている Zoom であるが、３月末の段階で使用したことのある教員はおらず、まずは数名が職員室に集まり、操作方法を知るところから準備を始めた。準備の様子を見ていた他の教員も次々と参加し、教室から教室への配信についても徐々に慣れていくことができた。また、新入生とその保護者の方々に対しては、学校のホームページで入学式当日の式典中止と、新入生登校日として密を回避するため生徒だけが教室に入り諸手続を行う旨を伝えた。

こうして、春休み中に新しい試みへの準備を整え、４月３日の着任式と離任式、６日の新入生登校日での挨拶、７日の始業式を映像配信にて実施した。入学式を挙行できなかったのは残念であり、新入生にも保護者の方々にも申し訳ない気持ちが残っているが、映像配信については、今後の学校行事や休校期間中の学習支援の手段として有効に活用できる可能性を感じて新年度のスタートを切ることができた。

会議室から着任挨拶をする校長

教室に配信された映像

校舎外でのクラス発表



急遽作成したお祝いメッセージ

(3) 学校再開後の式典や集会

６月には全学年が揃って学校が再開されたが、現在でも体育館に約６００名の全校生徒を集めることはしていない。従って、この間の終業式・始業式、生徒会主体の全校集会などは全て配信形式で行っている。一部の教室で音声が流れないなどのトラブルが発生することもあるが、終業式や始業式は暑さ・寒さが厳しい中で例年行っており、今後も配信形式を続けた方が生徒にも職員にも負担軽減に繋がるのではないかと考えている。

３．ＰＴＡ活動

ＰＴＡ活動はこの１年間、大きな制約をうけることとなった。４・５月に予定されていた役員会・各種委員会は全て中止、または延期となった。５月２２日の総会は決算報告と予算案提示の必要性があるため、昨年度の決算報告や今年度の新役員一覧、予算案などの諸資料を学校のホームページ上に一時的に公開し、グーグルフォームのアンケート機能を活用して議題の承認を得る方式を採用した。例年とは大きく異なる実施形態となったが、保護者の皆さまのご協力により、無事に総会を成立させることがで

きた。

その後は、感染防止策を施しながら、６月・１２月の役員会を予定通り実施しているが、進路講演会など一部の行事は開催を見送ることとなった。

近年、ＰＴＡの活動については各学校で改革や見直しの必要性が強調され、本校も委員会の統廃合や会議の回数削減など、保護者・教員双方に過度な負担とならないように組織のあり方を見直してきた。しかし、年末の保護者を対象としたアンケートでは、

「コロナのため入学式などがなく、そのほかにも保護者が学校に行く機会がほとんどないため、様子がよくわからず、学校が遠い存在のように感じます。」（一部抜粋）

などのご意見も寄せられた。次年度も活動の制限がついて回ることは想定しているが、その中でも学校を家庭や地域社会に開いていけるよう、今年度できなかった授業公開日を設定するなど、活動計画を見直している。

４．教育実習

令和２年度の教育実習は、休校期間が５月までとなった影響もあり、前期と後期を合わせて後期に行うという異例の事態となった。実習期間も全員３週間ではなく、２週間での実施となった。そのため、一度に実習を行う学生が３６人となり、配属クラスの人数が３～４人と人数が集中してしまっていた。また、例年にはないコロナ対策が必要となった。変更した点は以下の通りである。

第一に変更した点は、授業観察である。教室内での密を避けるために普通教室においては教室内に入ることができる実習生を原則 2 名までとした。それに伴い、研究授業でも教室後方にパイプイスは置かず、教室外から見る形をとった。次に、朝の打ち合わせの形も変更した。例年、実習生全員が朝の打ち合わせに必ず参加し、そのまま HR 担当の教員と打ち合わせをして朝の ST に向かう。しかし、職員室内が教員と実習生を合わせると６０人を超えてしまうため、この密集を避けるため次のような形をとった。職員室での朝の打ち合わせは全員参加するが、HR 担当の教員との打ち合わせは、初日以外は、朝の ST を担当する実習生のみが行う。それ以外の実習生は、自分の HR へ向かい、廊下で生徒の様子を観察することとした。これにより、職員室内での密集を分散させることができた。また、本来であればマスクをして授業をすることはないが、実習生にも常にマスクを付けた状態での授業が求められた。実習生はその状況を理解して授業に臨んでいたということもあり、授業中の声の大きさに関してはさほど影響はなかったように思われる。しかし、生徒の表情の読み取りにくさは実習生の生徒観察において影響していたようだ。

コロナ禍での教育実習は不自由な部分も多かったが、前期の大学の授業をオンラインで行っていた実習生からすると、生徒と直接接することのできる時間は充実していたものだったように思われる。来年度も感染症対策を徹底しながら、教育実習を実りあるものにしていきたい。

５．国際交流活動

昨年度から附属高校の特性を活かして愛知教育大学の留学生との交流活動を推進している。しかし、この活動もコロナウイルス感染症の影響で４月から中断を強いられた。いわゆる第二波が収束した９月以降にオンラインも含めた活動再開を大学側と検討し始めた。検討を進めるうちに、やはりオンラインではなく、直接の交流を再開しようということとなり、昨年度に続いて、留学生の皆さんを高校にお招きして、書道部の活動に加わってもらう書道体験交流の機会を１２月に設けた。実施が決まった後にいわゆる第三波が拡大して不安もよぎったが、予定通り、マスク着用・手指消毒・換気など感染予防をした上で実施することができた。マスク越しではあったが、初めて筆を持った留学生だけでなく、久しぶりの交流活動に高校生も積極的に取り組んでいる様子が覗えた。

英語と日本語を交えての自己紹介

メキシコの美術の先生による作品

コロナ禍の交流活動には様々な意見があるであろう。しかし、現在の困難は個人だけ、あるいは日本だけの問題ではなく、国境を越えた問題である。そうである以上、オンラインも含めて今後も国際交流活動を継続していく意義があり、担当分掌として持続可能なものにしていく使命も感じている。

６．おわりに

今年度、学校現場では感染予防の観点から様々な対応を迫られた。学校再開直後は経験したことのない事態に生徒だけでなく教員にも戸惑いがあったように感じる。しかし、新たな対応を強いられたことは今までの業務を見直す契機ともなった。本稿で報告した式典やPTA活動などは感染予防上の対応が、教員の負担軽減に繋がっている部分もある。目の前の生徒達により良い教育を提供するため、また教員志望者の減少が懸念されるなか、教員の仕事の魅力をアピールしていくため、コロナ禍での経験を活かして日頃の業務を見直し、働き方改革を進めていきたい。